園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2026年4月号



●保育園の玄関の桜が今まさに満開です。例年この桜を見て思いを馳せるのが、早い遅い多少の違いはあれ、この時期になればどの桜もまるで示し合せたかのように一斉に花開き、満開の時を迎える自然の不思議さについてです。これは何も桜の開花だけに限った話ではありません。一面茶色の冬景色の中で、いち早く鮮やかな紅白の花をつける梅。その梅の花が終わりかけると、白木蓮が一斉に大きな白い花をつけます。





その白木蓮が散り始める頃、木々の枝の先に赤ちゃんの手足のような柔らかい新芽の芽吹きを見つけると、私の心は躍ります。が、それも束の間、翌日には新芽が茶色一色だった木々を一気に萌黄色（もえぎいろ）に彩っていて、その変わりようには目を見張ります。





――まるで自然界のバトンリレーに立ち会っているかのようにさえ感じられる、1年の中でも生命力溢れるこの季節が私は大好きで、この時期は日々移り変わる自然の姿から目が離せません。

●それは保育園に通う子どもが成長する姿を見ても同じ感情を抱きます。子ども一人ひとりの個性・特性は違えども、例外なく確実にその子らしい成長を遂げていきます。保育園の園長として、毎年そういった子どもの成長発達に関わり、見届けることができることは私にとって大きな喜びとなっており、文字通り天職であると感じています。

●そんな私も、実を言うと初めから保育者としての道を歩んだわけではありません。いわゆる異業種からの転職組です。保育園に勤める直前は、銀行でネットバンキングのサイバーセキュリティを担当していました。私の経歴は過去のお便りにも記載したので詳細は割愛しますが、既にあれから ３ 年が経過し、初めましての保護者様も多くおられます。そこで今回は切り口を変え、私という人間の自己紹介も兼ね、なぜ保育園という道を選んだのか、そのきっかけについてお伝えさせていただきます。そして、子どもにとってのみならず、私たち親世代にとっても保育園時代の「今」が如何に大切かについて、私の考えを述べさせていただきたいと思います。

保育の道に進むきっかけは、第一子の誕生

●私が乳幼児の成長発達に興味を抱いたきっかけは、自分に第一子が生まれたことでした。まだ首も座っていない、か弱いわが子をぎこちない手つきで抱き、その顔を眺めていた時、彼の表情から「僕をきちんと一人前の人間として扱ってほしい」という、彼の自我というか意志のようなものをはっきりと感じたのです。

●当時の私は、そういった自我はもう少し後の方の発達段階で出てくるのではないかという気がしていたので、この発見には正直驚きました。その時、「ああ、昔から言われる『三つ子の魂百まで』という言葉は本当なんだな。」と実感し、乳児期の発達に強い関心を持つようになりました。その後は乳幼児段階からの人的・物的な関わり方がその子にどんな影響を与えるのか、自分なりに文献を調べたり、休日には幼児教育に関する講演などに足を運んだりするようになりました。

●保育園の仕事を自分の仕事にしようと思ったきっかけは、わが子を保育園に預けたことです。言葉による意思表示ができない乳児の段階から子どもの気持ちを汲み取り、愛情をもって一所懸命にその子の成長・発達を支援してくれる保育士さんの仕事ぶりを目の当たりにし、世の中にこんな偉大な仕事があるのかという驚きと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

異業種出身の自分だからこそできることがある

●そして同時に、この仕事の社会的な価値や大変さと社会における評価・処遇が必ずしも釣り合っていないのではないかとも感じました。現場の保育士さんたちが、自分たちの仕事に誇りを持って生涯続けられるような物心両面での支援が絶対的に必要だと思ったのです。

●そして、この仕事の実態と社会的評価のミスマッチが起きている原因は、各保育園で行われている保育の意図やねらい、それを実現する保育内容が論理的・科学的に整理されていなかったり、社会に向けて発信する力が業界全体として弱いからではないかとも思いました。だとすれば、自分のような異業種で育った人間が保育業界

でお役に立てることは必ずあるはず。そう思い立ち、転職を考え、紆余曲折を経て今の立場にあるというわけです。

子育ては、親自身の子ども時代の学び直し

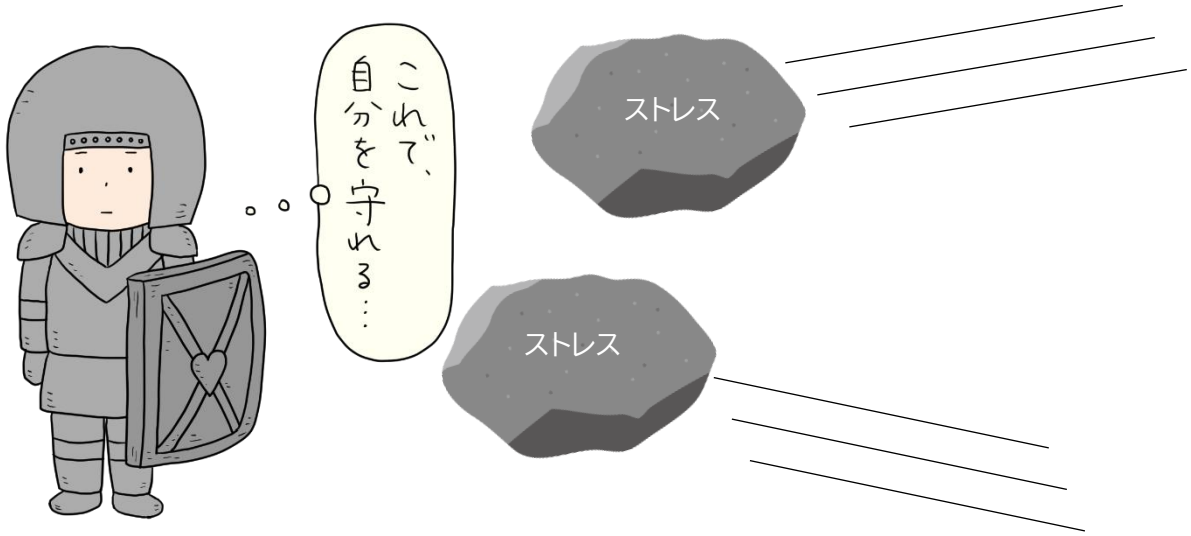
●ここでもう一つ、保護者様にぜひ共有させていただきたい私の思いがあります。それは園長としてというよりも、2 児の親としての実感ですので、きっと皆さんにも共感していただけると思うのです。

●私は自身の子どもを育てながら常に、**「ああ、私は、子育てを通じて自分自身の子ども時代をもう一度学び直している」**という実感がありました。子どもができて初めての公園、初めてのプレーパーク、動物園、水族館、田植えやキャンプ等々。各種子ども向けのアクティビティに参加し、見守りながら、気づけばわが子以上に前のめりで無邪気に感性を震わせながら楽しんでいる自分がそこにいました。ある時は、わが子から昆虫や草花の絵を書いてほしいとせがまれ、実物を観察しながら書くことで、自然が織りなす造形美に気づき純粋に感動しました。プラネタリウムでは、宇宙の神秘と星の美しさに涙を流しました。それは、普段の仕事上では心のずっと奥底にしまい込み忘れてしまっていた懐かしい感情であり、感性です。



乳幼児期こそ、親の感受性の扉が開くゴールデンタイム

●私たちは大人になるにつれ、**忍耐力や協調性、鈍感力などの社会的スキル**を身に着けていきます。それは、厳しい競争社会で生き抜くための自らを守るための**鎧**であり、それ自体必要なものであることは確かです。営業成績を上げるため、社内の多数の利害関係を調整するため、顧客からの理不尽なクレームに心を折られないため…



人は知らず知らずのうちに**「社会性」という名の殻**で、自身の感受性を、まるでダチョウの卵のように固くコーティングしていきます。

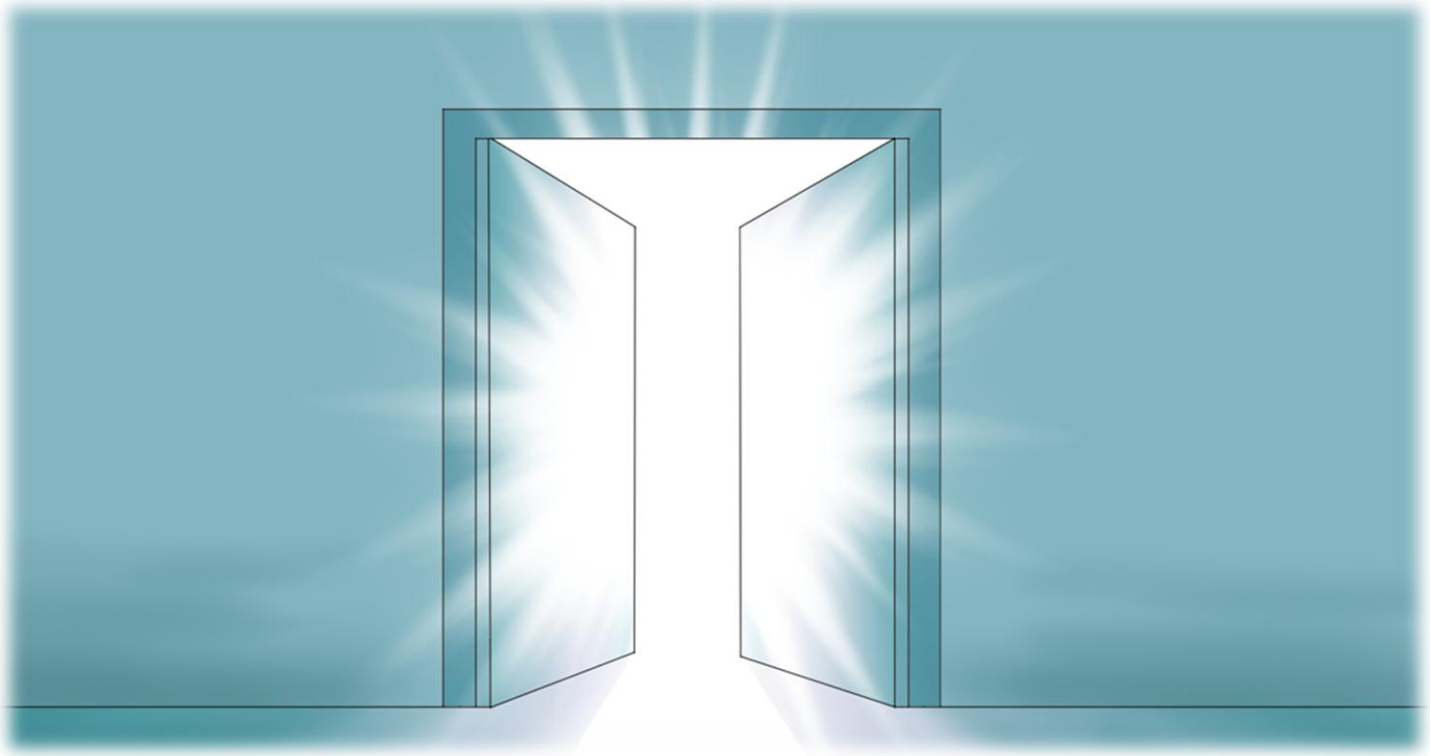
●しかし、子育ての際、とりわけ**子どもが乳幼児の時は、子どもとの関わりの中でその固いダチョウの卵のような社会性の殻が、まるで温泉卵のようにふるふるっと柔らかくなる瞬間**が訪れます。



社会性の殻は、感受性の扉と言い換えられるかもしれません。社会

に出ることで固く閉ざしていた感受性の扉が、人生の中でもう一度だけ、期間限定で開くゴールデンタイム――

ひとたび感受性の扉が開けば、思考は子育てを通して「自分は何が好きなのか」や「何のために生きるのか」、「人生で最も大切なものは何か」等、本質的・哲学的なことに及んでいきます。子育てを通じて自分自身の人生観・世界観をもう一度問い直す時期。重要なのは、その扉が開いている期間です。残念ながらそれは、子どもを保育園に預けている「今」しかないのではないか、そう私は思うのです。



●だからこそ、親自身のためにも、この時期に子どもとたくさん関わること、子どもと同じ体験を共有することが非常に大切です。そして、この時期に子どもと同じレベルの感性で交わった親子関係は強い絆となり、その後の子どもの人生にとっても大きな味方となるはずです。

●私はそのことを思う度に、乳幼児期の子どもだけでなく、感性の扉が開くゴールデンタイムの最中にいる保護者様と保育の仕事を通じて関われていることにやりがいを感じています。「子どもって可愛いですよね。」「あの時から、すごく成長しましたね！」「子育てって楽しいですよね！」そんな風に会話しながら、保護者の皆さまと泣き笑い喜び合えることが私にとってこの仕事の醍醐味です。

●冒頭に掲げた**「過去が咲いている今　未来の蕾でいっぱいな今」**という言葉は、まさしく子どもたちの姿、成長過程を言い当てたものであり、先日の卒園式でも卒園児の保護者様に紹介しました。





小学校に進む子どもたちにとって、この言葉は、**前に進む勇気と希望**を与えてくれます。

他方で、私たち保育者にとっては、**一人ひとりの子どもの「今」にどれだけ真剣に向き合えているかを日々省みる言葉**でもあります。

今年のふかさわミル保育園の事業計画の中には**「省みる」**という言葉が入っています。常に省察しながら、一人ひとりの興味と発達に向き合い、子どもたちの未来へたくさんの蕾をつけられるよう、**今を大切に**保育してまいります。どうぞ安心してお預けください。

進級・入園おめでとうございます。

今のあなたが今のあなたの運命に相応しい（釈迦）

あなたの行動はあなたの未来の予言者である（キリスト）

（言葉の引用：人生の法則　藤尾秀昭著　致知出版社）

園長　橋本　英明